

書 評

水谷雅

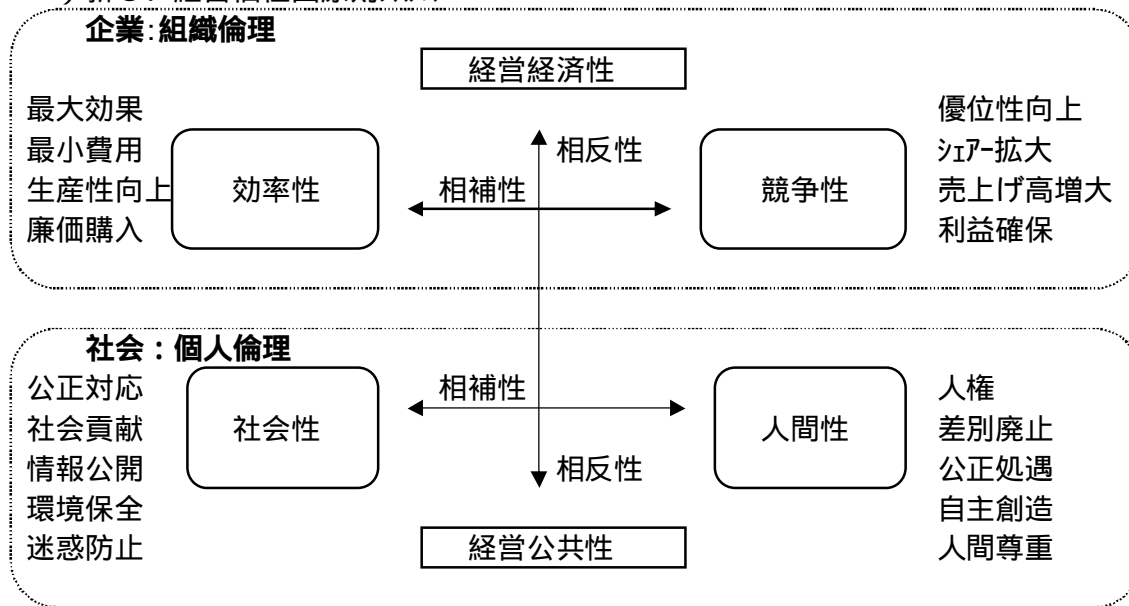
「経営倫理学のすすめ」

丸善ライブラリ-(1998年6月 初版)

今日ほど経営組織体に求められるものは、人権・公正・環境などの人間・社会を常に視野にいたした経営ではなかろうか。倫理の出発点は人間の共同生活にありその共同生活を維持する規範が倫理であるから、利益の前にはいかなる制約も受けないという組織は反社会的怪物である。かつて外部不経済活動として適正な環境費用負担を受け付けない行為はあったが、現時点では地球環境保全を当然のことと理解されるようになった。

市民社会の成熟により価値観が大きく変化し、これに対応した形で利益を確保しながら人間や社会を重視する経営こそが経営倫理にあう企業と言える。企業の環境保全活動は ISO規格により国際的に標準化され著しい改善を見た。今日では地球温暖化防止活動によってその企業の環境経営の真価が問われる時代に入っている。企業経営の中に倫理的観点を持ち込むことは決して矛盾したことなく、企業の社会的責任を果たすことによって利益が確保されるという環境経営的観点に立つ必要がある。そうでなければ雪印食品のように淘汰されるかもしれない。新しい経営価値の創造（四原則経営）に関して本書の内容を紹介し、併せて環境経営について考察したい。

1) 新しい経営価値四原則システム



2) 環境経営との関連

1989年3月 Exxon 社のタンカー「バルディーズ」号がアラスカ沖で起こした史上最悪の原油流出事故より企業の環境倫理（環境経営）問題のバイブルといわれる「バルディーズの原則」が導かれた。

生物圏の保護

天然資源の持続的な活用

廃棄物処理とその量の削減

エネルギーの知的利用

リスクの削減

安全な商品やサービスの提供

損害賠償

情報公開

環境問題の専門取締役/管理者の設置

評価と年次報告

環境経営は経営倫理の一部であるが、企業の社会的責任として分かりやすい。経営倫理はさらに人間・社会をふくむ広範な倫理と考えればよい。